

齋藤 道子 編著 『時間と支配 時間と空間の文明学』

東海大学出版会、2000年

平野 葉一

時間神クロノス (Chronos) は、一方の手に砂時計、他方の手に大鎌を持って描かれる一砂時計で生命の糸の長さを測り、それを大鎌で切断するという。これは古代ギリシア人によって寓意的に捉えられたイメージが継承されたものであると言われるが、その姿はいつの時代であっても時間に支配される人間を象徴している。

確かに人間は、太古の時代から様々な形で「時」を測ってきた。日の出や日の入りというような天体の運動、日時計や水時計そして機械時計など、人間は自然の力を利用しあるいは自らの叡智が産み出した技術を用いて「時」を手にしてきたのである。たとえば、バビロニアでは太陽と星の位置の観測から、1年がほぼ365日に等しいという結果を導き出していた。この周期性は、祭事や作物の収穫などといった人々の生活に密接に関係し、その意味では、一方では人々は生活のリズムを得、また、他方ではその周期性によって生活が規定されるという構造を形作っている。

そもそも「時間の支配」とはどのようなものであろうか。確かに宇宙は人間の意志とは無関係に一つの周期をもって運動している。しかし、「時間」が人間にとって意味をもつのは、それが人間の意識によって認知された結果だからである。こうした「時間」とは、大きく分けて二つの意味—非定時的意味および定時的意味—を有する。

「非定時的な時間」というのは、現在のように機械時計が刻む時間ではなく、人間の活動に依存する時間である。台湾の故宮博物館の展示品の中には、三世代にわたって彫られた象牙の彫刻がある。祖父から父そして子と受け継がれて彫られたこの作品を見ると、まるで彼らにとっては時が停まっていたのではないかという感覚さえ覚える。おそらく彼らの周りでは、完成の期限に向かって刻む時間が存在していたのではなく、作品の完成が一つの時を刻んだのであろう。このように、いわゆる職人と呼ばれる人々の価値に規定される時間の流れは特別であるにしても、「非定時的な時間」は人々の日常の生活においても存在していた。トフラーのいう第一の波、いわゆる農耕社会においては、人々は日の出とともに畑に出、日没とともに一日の作業を終える。そして、日照は単に一日を規定するだけではない。農耕作業では、たいていは日の長い時期ほど忙しく、また、日の短い時期は農閑期となる。このようにして、日の長さという時間要素は一年という周期を通しての人々の生活リズムをも決定することになる。すなわち、彼らにとって生活の時を刻むのは自然のリズムであり、また、農作業のリズムであったのである。

一方、「定時的時間」とは全ての人々にとって一様に流れる時間であり、機械時計の出現によって生じた量的な時間である。エリアーデの言葉を借りれば、それは「俗なる時間」—連

続する非可逆的な時間であり、人間の意志とは無関係に過去から未来に向かって流れる時間である。確かに機械時計の出現以前にも、時をはかる道具は用いられていた。たとえば、日時計はB.C.4000年のエジプトではすでに用いられていたと言われているし、B.C.6世紀のピタゴラス学派が数学的術語として用いたグノモンは日時計の針のことであった。また、B.C.270年にはギリシアの発明家クテシビウスが水時計を考案し、好評を博したと言われている。それでも機械時計の出現は、人々に正確な時間の秩序立てをもたらすと同時にやがては社会の変革をも要求するに至る。たとえばヨーロッパにおける鉄道網の普及による標準時の設定、工場などにおける生産性の向上をめざした就業時間の徹底などがそれであり、人々は「定時的な時間」の概念を自らの中に定着させ、逆にその時間によって規定されていくことになる。

このように見てくると、「非定時的時間」にしろ、また、「定時的時間」にしろ、人々に対する時間支配の姿が浮かび上がってくる。人々が時間に支配されるのは、時間が人々の生活を規定するからであり、それによって与えられた生活のリズムが人々の意識を時間へと埋没させていくからである。

こうした時間概念とその支配について文明学の視点から議論しているのが、本書『時間と支配—時間と空間の文明学』である。この書は、東海大学文学部教員を中心とした共同研究会「時間と空間の文明学」の研究成果で、前書『時間と空間の文明学Ⅰ—感じられた時間と刻まれた時間』（松本亮三編、花伝者、1995年）に続く2冊目の出版物である。本書では、四名の著者が時代や地域を異とする四つの文明の立場から「時間」、「空間」概念とその「支配」の構造について論じ、それらを現代に結びつけることで情報化社会と言われる現代にあつての「時間」と「空間」の意味を探ろうとしている。

本書は全体として次の五編の論文から構成されている：

「時間と支配」（齋藤道子）

「明治期—農村人の時間と空間」（原田敏治）

「春秋時代の支配権と時間」（齋藤道子）

「球戯と王権—マヤの神話『ポボル・ヅフ』に語られた世代交代と権力の継承」（横山玲子）

「計時と象徴営為」（齋藤博）

最初の「時間と支配」では、本書の主題である「時間の持つ規範力、強制力が人間や社会をどのように支配・管理する「力」として表出されるのかという問題」（本書p.8）が提出される。齋藤道子氏は、まず、前書『時間と空間の文明学Ⅰ』の中での議論—人間があるいは人間が属する局地的な社会が意味を共有する「感じられた時間」から高度に抽象化、普遍化された「刻まれた時間」への変化—について振り返り、そこから次なるステップとして、これらの時間概念が時代を通して個人または集団に対してどのような強制力を行使してきたかという問題を設定する。そして、一方では「自らが支配者」として、また、他方では「それを所有する者を権力者たらしめる多産材」として、人間を支配する時間の二相構造を提起する。この時間支配の二相構造という論点は、読者に対してその支配構造を考える上での一つの視点を示唆しており、これと合わせて続く四論文の紹介が各論文を一つの方向軸の上に位置づけるという点で、本書の意図をわかりやすいものにしていく。

続く「明治期一農村人の時間と空間」は、相澤菊太郎という明治期の一農村居住者にとっての時間と空間の広がりの変化について扱った論文である。原田氏は時間地理学で用いるbundleなる概念を導入する。これは人々の生涯の行動が時空間内に描くpathが通過する個々の空間的場所を意味し、それゆえに、人々はbundleにおいて他者と時間を共有していることになる。bundleによって農村居住者の生活を分析しようという原田氏の試みは、明治期という社会変化の激しい時期に一農村で村長を務める相澤菊太郎にとっての時間と空間の変化を如実に表している。相澤の周りで流れる時間は、一方では農民としての年周期の農事に規定される時間であり、他方では行政者としての日々の事務執行に規定される時間である。特にこの時期には明治政府による新暦の導入が見られ、農民にとっての習慣が国民的「時」にとってかわられる側面をもつ。公職者に属する相澤は農民としては多くの非労働時間を有し、それゆえに彼のbundleは、田畑から村役場へ、そして交通網の発達に伴ってより広範な範囲へとひろがっていく。その姿は、19世紀初めに時計が普及する中で職人的な家内労働者から工場労働者へと変化せざるを得なかったヨーロッパの人々のイメージに重なる。彼らと同様、相澤もまた「感じられる時間」から「刻まれる時間」への移り変わりの過渡期に身を置いていたわけであるが、相澤はその時間支配の変化がもたらす社会的変化を体験すると同時に、公職者として時間支配の変化を執行する歯車の一つでもあったのである。

齋藤道子氏の「春秋時代の支配権と時間」では、計算による暦出現以前の中国春秋時代における時間支配の一つの形が論じられている。それは支配者による時間の生産と管理に関する問題で、当時の政治的支配がいかに時間・空間支配に大きく依存していたかを示すものである。齋藤道子氏は『史記』（これ自体は春秋時代以前）をはじめ『呂氏春秋』、『礼記』や『左伝』などから数多くの事例を引き、「時間」に関わる支配構造を明らかにしていく。そして、ある権力が他国を支配するとはその国の時間概念を否定し自らの時間概念を確立することにあると指摘し、次のように述べている。「為政者が儀礼や祭祀によって正常な時を作り出すことがまさに支配者として要求されることであったが、さらに…一年の季節に応じて、ある事をするべき時とそうでない時をあやまたない、すなわち物事を行うべき時をきちんと見きわめることも支配者としての重要な任務であった。」(p.57)。結局、春秋時代の中国においては、一年を通しての気候の変化などに呼応した農作業などに関わる祭事などに加えて、支配者が古代社会から引き継いできた「決めごと」を基にして時の流れが決定される。それは、為政者である政治的支配者の権利であると同時に義務でもあり、その意味で、為政者の支配という形で時間の支配が行われるのである。齋藤道子氏は、こうした為政者による時間の支配構造が、春秋以後、戦国時代などの社会変動においてどのように変化するかという新たな問題を提起し論文を結んでいる。

次の「球戯と王権」では、マヤの神話に語られた時間秩序を伴う権威の誕生が論じられている。横山氏は、マヤの創世神話である『ポボル・ヴフ』に語られている球戯に着目する。この神話は、二世代の双子の兄弟と地下のシバルバー神との球戯を含む抗争の物語である。最初、双子であるフナフプー兄弟は、彼らのもつ球戯の道具を奪おうとする地下のシバルバーの神々の策略によって殺されてしまう。その息子世代である双子の兄弟フン・アフプーとシュバラ

ケーは、残されたボールと道具を用いて再びシバルバー神と対決するが、シバルバー神の策略をことごとく見破った末に球戯でも勝利した兄弟は、最後には太陽と月となる。横山氏は、球戯を世代交代の手續きとして、また、その道具であるボールを受け渡される権力の象徴として捉えている。そして、子供世代の双子の兄弟が最後には太陽と月になったことを指して、「権力がボールによって象徴されるとともに、光を放つ天体（太陽と月）、特に太陽としても表現され、権力とボールと太陽の三つが象徴的に重なり合う」（p.119）としている。ここで、太陽と月は人間にとって最も明快な時間の区切りを意味すると考えることができる。それゆえに、この神話は、マヤという文明社会における権力者が時の支配者たる構図を描き出している。

最後の「計時と象徴営為」では、齋藤博氏が前書『時間と空間の文明学Ⅰ』の論文「文明営為と時間」で提起した問題—「刻まれた時間」が現代文明にもたらした「いま」という過度の共時性とそれによって生じる「いま」の社会的空虚の問題—をさらに発展させ、現代における時間支配の変化について論じている。齋藤博氏は、バーバラ・アダムの分類である「事象の内にある時間」(time in events) と「事象の外にある時間」(events in time) から議論を進める。機械時計の出現以来、我々の社会は自らの意志で、そしてやがては無意識の中で、画一化された時間によって秩序づけられてきた。我々の社会に対する「刻まれた時間」の支配である。しかし、情報化社会が侵攻しつつある現在、時間がこれまでとは違った意味をもつようになってきている。齋藤博氏は、こうした時間をアタリに従って「コードの時」として位置づける。それは、コンピュータによるネットワークや携帯電話などの爆発的普及によって、個々人にとっての時間がこうした通信システムの内部に組み込まれていくことを意味している。そして、「意味を刻む計時装置は時をコード化することによって時の意味を言葉によって語る。こうして時の概念は時間や時刻以上の余剰としての意味を含んでいる。」(p.187) と続ける。機械化された時間の中では事象は時間の内部に取り込まれていく (events in time)。これに対して、「コードの時」では、時間は事象の内に内在し (time in events)、人間そのものが時間を組み込んでプログラムされた存在となる。時間のコード化は、個々人にとっての「いま」に固有の意味を与え、それゆえに人間の象徴営為となるというのである。齋藤博氏は最後の言葉を「コードの時を刻む計時装置の出現は人間の文明営為の価値秩序と支配構造を変革することも間違いないことであろう。」と結んでいる。

本書が提起している問題は「時間の支配」である。これまで見てきたように、本書の著者たちは「時間」に対する人々の意識と、それによって逆に「時間による支配」が生じる様子を文明の様々な構造の中で論じている。それと同時に、本書は将来へ向けての課題も投げかけている。「時間」はこれまで人間の生活の枠組みとして存在してきたし、それゆえに「時間の支配」、そして、多産財としての「時間」ゆえに生じる支配者も存在してきた。しかし、時間のコード化により、「時間」がもはや空間的な支配の領域を超えて存在する状況が生まれている。齋藤道子氏は論文「時間と支配」の「5. 支配者の手をすり抜ける時間」において次のように述べている。「…「多産財」としての時間は、いまや限定された領域を支配する支配者の手からすり抜けていきつつあるようである。国境（限定された空間）によって区切られた領域を前提としてきた「支配」は、この時間の逃亡にどう対処するのであるだろうか。」(p.19) と。